

B-24 纖維製品の清浄性における細菌学的研究(第1報、親・疎水性繊維の皮膚表面に及ぼす影響) 福セ大家政 平松園江 合谷美智子 早野泰子
山口大教育 O上村元子

目的 下着は体にふれて保温、吸湿するほか汗や汚れを吸着して皮膚表面の清浄を保つ役割を果たす。化繊又は天然繊維の布を着用した場合の皮膚表面の細菌の生息状態を調べ、皮膚上の菌数が布の吸水性、疎水性に関係がないかを調べたいと考えた。

方法 被験者成人女子4名。供試布は木綿、アクリル平織。菌採取部位、額・頸・前腕前側部。洗浄3時間後、局部に柄付けリングをあて菌採取用液(トリトン燐酸緩衝液pH7.9, 燐酸緩衝液pH7.2)を1ml注ぎ、滅菌テフロン棒で60秒間こすり、さらに1mlを入れくり返して計2mlを検体液とした。5段階10倍希釈し平板培地(TSA培地、普通寒天培地)上に0.025ml滴下し、37°C、48時間培養後、算定可能な希釈段階で皮膚面の1cm²当りの細菌数を算出した。

結果 採取部位、額・頸・前腕のうち額がけた違いに菌数は多かった。したがって以後の測定部位は額とした。採取液、培地については上記のそれぞれ2種間には有意差が認められなかった。トリトン燐酸緩衝液ならびにTSA培地を採用した。額の菌数は個人、場所、洗顔後の時間的な差があった。菌数は $10 \times 10^2 \sim 40 \times 10^3$ であった。吸水、透湿の良い木綿を頸部位につけた場合はつけない時と菌数にほとんど差が認められなかった。アクリル布をあてた皮膚面は個人差が大きい2名が割合菌数が多く、2名が少なかった。要因分析の結果では有意差は出なかったが、常在菌数の少ない人はほとんど差がみられず、菌数の多い人は顕著に差があり、アクリル布をあてた皮膚面は菌数が多かった。